

長法寺跡

—高島市鶴川—

埋蔵文化財活用ブックレット3 (近江の山寺3)
長法寺跡 —高島市鶴川—

刊行：平成22年10月31日
編集：滋賀県教育委員会・高島市教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674 FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp
印刷：共栄印刷株式会社

目次

1. 長法寺と高島七カ寺	1
2. 長法寺について	2
3. 長法寺跡に行ってみよう !!	4
4. 長法寺跡の姿	7
5. 長法寺跡を探る	10
1) 長法寺跡の構造	10
2) 寺院の中の城－東尾根地区－	11
3) 西尾根地区へ	12
4) 謎の重要施設－伝「鐘楼跡」とその周辺－	14
5) メインストリートー道Ⅱ周辺の石垣・石塁	17
《コラム》長法寺跡の石垣	18
6) 本堂跡とその周辺	20
《コラム》長法寺跡の石造文化財	24
7) 坊跡の遺構	26
6. 長法寺跡周辺のみどころ	28

用語集

伝教大師最澄 でんきょうだいし さいしやう	天台宗の宗祖。比叡山延暦寺を創建。
慈覚大師円仁 じかくだいにん えんにん	最澄の弟子であり、第三代天台座主。遣唐使として中国に渡り、日本の天台宗を大成させた。
坊 ぼう	寺院(長法寺)に所属する僧侶たちが居住・生活する寺院。子院ともいう。
石塁 せきい	両面を石垣で造った石壁。
礎石 そせき	建物に用いられる柱を支える基礎の石材のこと。
水枡 みずます	生活用水などに用いるため、雨水や湧水を溜める方形の石組み遺構。
五輪塔・宝篋印塔 ごりんとう ほうくわういんとう	石塔の形式名。中世以降、供養塔などに用いられることが多い。

本埋蔵文化財活用ブックレットは、高島市教育委員会と滋賀県教育委員会が協働して原稿を作成し、滋賀県教育委員会が国庫補助金（埋蔵文化財保存活用整備事業）を受けて刊行しました。

1. 長法寺と高島七カ寺

長法寺は、比良山地が琵琶湖に最も近づく滋賀県高島市鶴川の標高約370 mの長寶（宝）寺山と呼ばれる丘陵上に位置します。琵琶湖との比高差は約285 mあり、南方と西方に眺望が開けています。

平安時代に伝教大師最澄によって、比叡山延暦寺が開かれ、近江では多くの寺院が建てられました。その繁栄ぶりは、江戸時代になって「比叡山三千坊」（『淡海温故録』）と称されます。

高島郡においても、「高島七カ寺」と呼ばれる天台宗の有力寺院が建立されました。これらの「七カ寺」は、慶長7年（1602）の「江州高嶋郡七ヶ寺之覚」（加越能文庫）では、長寶（宝）寺・世喜寺（旧高島町）・松蓋寺・大山寺（旧安曇川町）・清水寺・大（谷）慈寺（旧新旭町）・酒波寺（旧今津町）とされます。

「七カ寺」と称する寺院についてはいろいろな説があり、享保19年（1734）に膳所藩士である寒川辰清によって編さんされた『近江輿地志略』は、酒波寺のかわりに米井寺を「七カ寺」に入れています。また、ここでは長法寺を「高島郡七箇寺の第一」としています。



長宝寺山より南方を望む（旧滋賀郡を一望できる）

2. 長法寺について

長法寺の創建や廃絶した年代は不明ですが、開基は、慈覚大師円仁と伝えられます。

また、長法寺山麓にある日吉神社が、嘉祥2年(849)に坂本から山王権現を勧請し、創建されたとされ、この時に「長法寺」の鎮護の神にしたとされ、長法寺の創建時期を考える上での参考になります。

周辺集落と長法寺の関わりとして、高島市音羽の長谷寺に伝来する平安時代後期の木造薬師如来坐像は、長法寺の本尊と伝えられ、現在、重要文化財に指定されています。また、打下の集落には、長法寺にあったとされる涅槃図が伝わっています。

長法寺に関わる確実な史料として、弘安3年(1280)の裏書のある『近江国比良庄絵図』には一堂が描かれ、その名が記されています。

また、高島市朽木中牧の大宮神社に伝わる大般若経の一部は、坂上経忠によって、元久2年(1205)に長法寺に施入されたことが前書・奥書に記されています。別の奥書からは文保元年(1317)に修理したこともうかがえます。永享4年(1432)には、長法寺の方丈職を、延暦寺の円明坊兼宗がつとめ、音羽五ヶ村を領していたとされています。円明坊兼宗は青蓮院門跡の山徒であったので、当時の長法寺は、青蓮院門跡の末寺であった可能性が推測されます。

『高島郡誌』は、文明3年(1471)11月の売券に記された「長法寺大品坊」とあるのが、長法寺の最後の記録としています。

また、伝承では、元龜3年(1572)の織田信長の焼き討ちにより灰燼に帰し、廃絶に至ったと伝えられています。



長谷寺 木造薬師如来坐像



近江国比良庄絵図(県指定文化財・北比良区所蔵)

この絵図は、南北朝時代頃の比良庄(大津市北比良町ほか)と隣接する荘園の境界を描いた絵図の写しです。比良庄周辺の景観が描かれており、白鬚神社の背後の山中(絵図の中央右端)に「長法寺」と記された堂がみえます。

3. 長法寺跡に行ってみよう!!

長法寺跡の見学には、JR高島駅からが便利です。駅から南に歩いて約5分で乙女ヶ池の西方、JR湖西線のトンネルの北方の谷筋の入口にたどり着きます。獣害柵の扉をあげ、ハイキング道を登り始めましょう。なお、登り口には駐車場はありません。車をご利用の場合は、駅周辺の駐車場をご利用下さい。

見学コースは、JR高島駅→登り口→長法寺跡→下の鼻打（峠）→打下城跡への三叉路→日吉神社→JR高島駅です。所要時間は見学を含めて4～5時間程度です。

登り口から長法寺跡まで約90分。登り口からは乙女ヶ池や琵琶湖を望むことができます。途中、「ヤクシガミネ」と呼ばれる切り通しや蓮池を見ながら、山道を上ると、遺跡の東端、東尾根地区にたどり着きます。

遺跡見学には30分～1時間程度かかります。その後、寺跡から「下の鼻打」峠まで約20分の上り坂です。この区間にある鉄塔の下からは、琵琶湖と湖東平野が一望にできます。峠から「馬の足跡」と呼ばれる巨石の横を通り、約10分で打下城跡への三叉路に着きます。ここから

戦国時代の山城 打下城跡までは約10分の距離です。時間が許せば立ち寄られてはいかがでしょうか。三叉路から谷筋まではつづら折れの急な下り坂です。谷筋に沿って下ると途中、砂防ダムを経て、ふもとの日吉神社まで約30分程度です。日吉神社からJR高島駅までは約10分です。「ヤクシガミネ」の切り通し 写③



登り口 正面の谷間の山道を登ります。写①



登り口付近の道標 写②



「ヤクシガミネ」の切り通し 写③

ハイキング道は、トンネル北側の登山口が少しわかりにくいですが、コースには道標が精しく設置されています。

※長法寺跡がある比良山地には、シカ・サル・クマなどの野生動物が生息しております。また、ハイキング道は倒木や落石などにより、通りにくくなっている場所もあります。遺跡見学には、安全に十分注意して行って下さい。

※長法寺跡周辺やハイキング道にはゴミ箱、トイレはありません。ゴミは各自で持ち帰って下さい。また、山中での火の使用はおやめください。



蓮池 ここまで来れば長法寺跡はすぐそこです。写④



長法寺跡（東尾根地区）の道標 写⑤



下の鼻打 写⑥



「馬の足跡」の巨石 写⑦



打下城跡への道との三叉路 写⑧



日吉神社 写⑨



小林裕季氏作成の『長法寺跡遺構図』に一部、加筆・修正して使用

5. 長法寺跡を探る

1) 長法寺跡の構造

長法寺跡は、昭和31～33年に滋賀県立高島高等学校歴史研究部によって調査され、34年に機関誌でその成果が報告されました。遺跡は標高約320～370mの南北に伸びる尾根から谷にかけて広がっております。その範囲は、東西約250m×南北約250mにおよびます。

長法寺跡では、谷の最奥部に本堂などの伽藍の中心となる堂塔が造られた本堂周辺地区があり、その前方の西側斜面～谷間（西尾根地区）と東尾根上（東尾根地区）に坊跡とみられる多数の平坦地が展開しています。坊とは寺院（長法寺）に所属する僧侶達が日々の信仰と生活を行う場（住居）です。

西尾根地区では、谷の方向（南北方向）に平行する道（道Ⅰ～Ⅳ）と、それらを結ぶ東西路（道a～e）が設けられており、道に沿って坊の区画が碁盤の目のように並んでいます。また、この地区の南端には「鐘楼跡」とよばれる小丘があります。

一方、東尾根地区には、尾根上に4つの平坦地が並んでいます。これらは、坊の区画を造り替えて城郭にしたと考えられる長法寺城跡です。



長法寺跡遠景 正面奥の丘陵の谷間に長法寺跡が所在する。

2) 寺院の中の城 ー東尾根地区ー

見学コースに沿ってふもとから登ると、東尾根地区の堀切（区画①・②間の道）にたどり着きます。そこで道はT字路となっており、左に曲がると、長法寺城跡に着きます。（右に曲がると本堂跡への近道です。）

長法寺城は、寺院の区画に改変して城郭としたもので、区画④の南側に開く喰違虎口や区画③の南～西辺に造られた土塁、区画②の北側の堀切などの防御施設をみることができます。

寺院内に築かれたこの城は、戦国時代の長法寺をめぐる緊迫した状況を示しています。

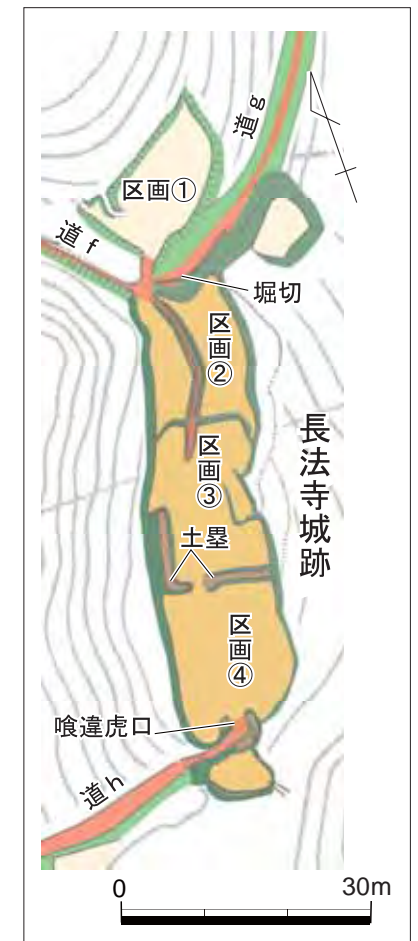


長法寺城跡 北側の堀切



長法寺城跡の南虎口

城外から直角に曲がらなければ郭内に入ることができない構造となっております。防御性を高めるため、周囲に土塁を設けています。



3) 西尾根地区へ

長法寺城跡の南虎口を出て西に下ると、開けた谷間に段々畑のような平坦地が現れます。これが西尾根地区の坊跡群です。小川を渡って、右に曲がり少し進むと左手に道bとその両側に築かれた石垣が見えてきます。

道bの坂を登り切ると、道は右に折れ、本堂へ続くメインストリート(道a)に続いています。ここで左側の区画に入ると正面に「伝鐘楼跡」のある小丘がみえます。



道bを上る

長法寺内の主要通路である道b。写真奥に坊群の石垣がみえます。石垣の手前が伝「鐘楼跡」周辺と道aの分岐点です。



谷間の坊跡(坊群)

坊跡は雑木林となっており、その中に石垣などが点在しています。



坊群

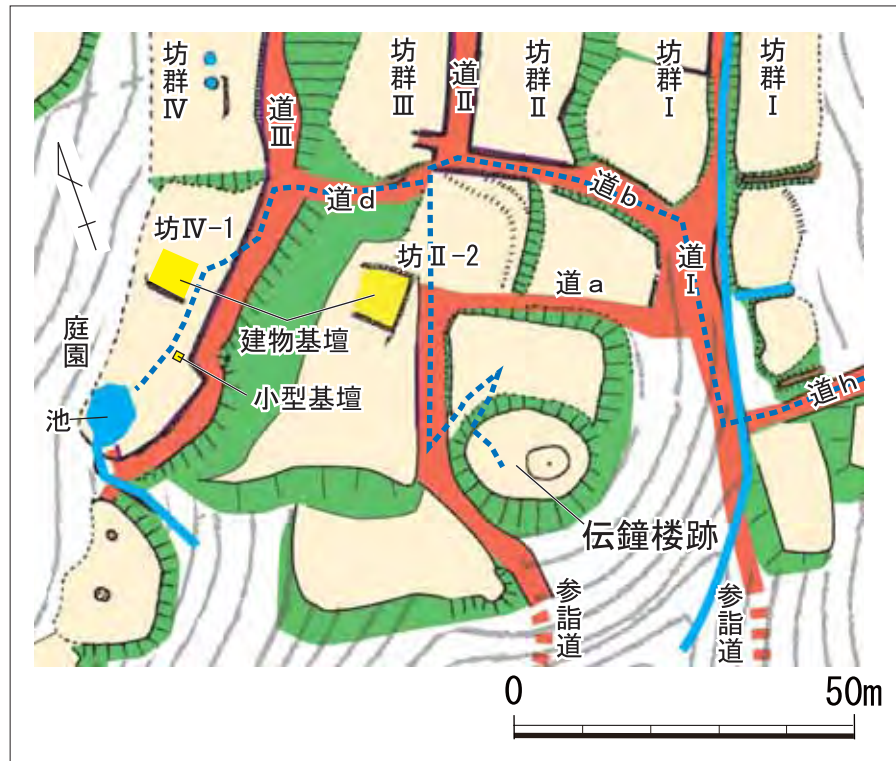
谷底の平坦地に造られた坊跡(坊群)は、谷川が運んだ土砂によって、湿地となっています。

坊群付近は沼のようになっている場所があり、危険ですので近づかないようにしてください。

4) 謎の重要施設 一伝「鐘楼跡」とその周辺一

伝「鐘楼跡」は寺域の南端に位置する小丘です。境内の南側の入口に位置しており、ふもとからの参詣道が横を通ることや、周辺の区画が造成された際、ここだけ削り残して高まりとしていることから、寺院にとって重要な意味をもつ場所であったと考えられます。ただ、丘の頂上では礎石や建物跡は見つかりません。ここからは、鶺川の集落や琵琶湖を望むことができます。

この周辺には、基壇をもつ建物跡（坊Ⅱ-2）や園池に巨石を配した庭園跡（坊Ⅳ-1）があります。また、坊Ⅳ-2でも、基壇をもつ礎石建物跡や石塔に伴うものとみられる小型の基壇などをみることができます。



伝「鐘楼跡」北側の平坦地から小丘の頂上をみた状況



伝「鐘楼跡」
「鐘楼跡」の高まりでは、明確な建物跡は確認できませんが、頂上は平坦面となっています。

伝「鐘楼跡」からのながめ（右）
木々の間から、鶺川の集落や琵琶湖が見えます。



小型の基壇（坊Ⅳ-1）（左）



坊 - 1 建物の基壇

石で囲まれて一段高くなっている部分が建物の基壇です。



坊 - 1 庭園跡

池跡の周辺に巨石が点在しており、庭園跡と考えられます。

5) メインストリート - 道 周辺の石垣・石塁 -

ふたたび、道bと道cの合流点に戻りましょう。道cはここから本堂手前までほぼ直線的に伸びており、その両側に坊群I・IIの区画が並んでいます。特に、坊群Iの東側には、道cに面して100m以上も連続して石垣・石塁が築かれており、壮大な景観をかもし出しています。また、道の反対側には坊群IIの石塁が部分的に残っています。こうした石垣・石塁は約450年以上前の室町時代後期に築かれたものなのです。

この先、道cを進むと、道cや道iとの合流点を過ぎた後、本堂跡に向かいます。



道cと坊群I・IIの石塁(手前)と石垣(奥)の間に道cが通っています。

《コラム》長法寺跡の石垣

長法寺跡では、坊跡の法面や通路の側壁として、石垣が多く用いられています。特に、坊跡の間を通る道や道の両側には、大規模な石垣が続いており、お城の石垣と見間違ふほどです。

織田信長が築いた安土城は、大規模な石垣を多用した最初の城郭です。その石垣は、全国に波及した城郭石垣の起源とされ、近江の寺院が有していた石垣構築技術を城に応用して築いたものと考えられています。

長法寺跡の石垣は、安土城以前に築かれた寺院石垣の姿を今に伝えるものとして極めて貴重なものといえます。



道沿いの石垣

石垣は、ほぼ垂直に3mを超える高さまで積み上げられており、中世近江における寺院の技術力の高さを伝えています。

この石垣は、石の積み方や石垣裏側にグリ石（小石）を入れる点など、安土城に先行する観音寺城（近江八幡市）の石垣と技術面で共通点が指摘できます。



坊群の石塁
石塁（石壁）



安土城跡主郭北虎口の石塁

坊跡の間を通る通路に面して、石塁（石壁）[左側の写真]がみられます。石塁は、内部に小石を詰めながら、左右の石垣を同時に積んでいく必要があります。石塁を築くためには、他の石垣と比べても高度な技術が必要でした。

織田信長が築いた安土城跡[右側の写真]でも、同じ構造の石塁があります。寺院がもつ優れた石垣を築く技術が、お城の石垣に受け継がれたことを示しています。



やあなこん
矢穴痕が残る石材（長法寺跡）



彦根城天守の石垣に残るの矢穴痕

石垣の石材、の部分に半円形の彫り込みがあります。これはクサビを差し込んで石を割るために開けられた穴（矢穴痕）です。

長法寺跡では、石塔や石仏にも矢穴痕が認められます。

彦根城の石垣にもクサビで石を割るための穴（矢穴痕）がたくさん残っています。

6) 本堂跡とその周辺

道を進むと、広い平坦地(- 1)に到着します。ここは寺院内でもっと大きい区画であり、その中央に本堂跡とみられる大型の礎石建物があります。高島高等学校歴史研究部の調査では、基壇や40個の礎石が確認されています。礎石は、一辺約0.8mの大きさで、その間隔は8尺(約2.4m)もしくは12尺(約3.6m)あります。本堂の規模は、7間(56尺=約16.8m)×4間半(36尺=約10.8m)と推測されます。また、本堂の両側では、石積みの溝なども見つかっています。

伝承によると、織田信長によって焼き討ちを受けたとされる長法寺ですが、本堂跡の礎石には熱をうけた痕跡こんせきが認められません。



本堂跡の基壇
林の中に礎石や基壇の側石が整然と並んでいます。



本堂の礎石
礎石は1辺0.8mほどの平らな自然石が使われています。

次に、本堂跡の裏手に回ります。そこには谷川が流れており、その対岸斜面に1辺1mほどの花崗岩の四角い切石があります。これは大型の石塔の基礎です。この西側には低い石垣で囲まれた8mほどの区画が設けられています。また、本堂の北西側の斜面には、人頭大の石を積み上げた塚（集石遺構）があります。この周辺は寺院の最も奥まった場所であることから、これらは寺院にとって重要な意味をもつものであったと考えられます。



本堂背後の方形区画



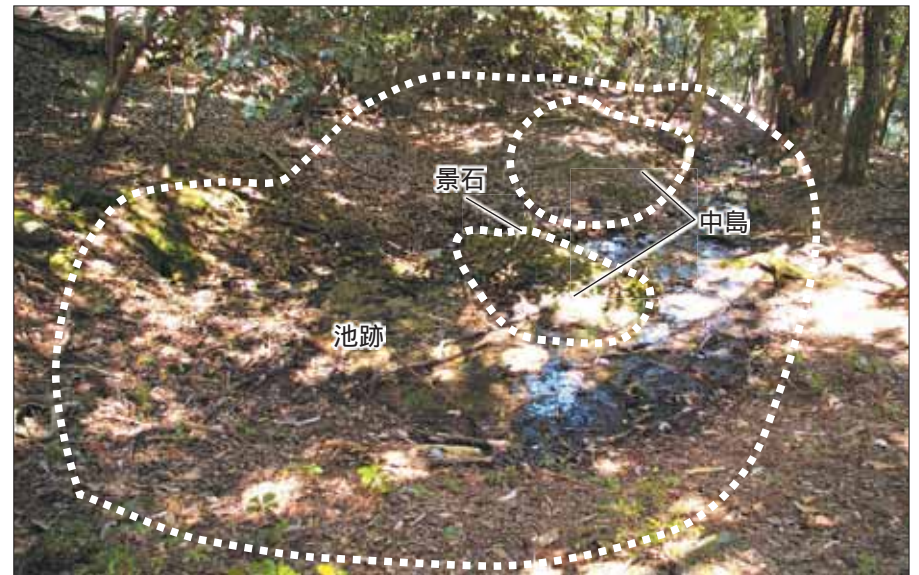
本坊（推定地）（ - 2 ）東側の入口

本堂跡の東下にある平坦地（ - 2 ）に向かいましょう。ここは、本坊跡とされる場所で、南西側と東側中央の2ヶ所の入口がみられます。東側の入口は、東尾根地区から続く道と接続しており、石段を上ったところに門の礎石があります。

また、道 を隔てて西側には、室町時代頃の庭園遺構が残る - 3の区画があります。庭園は小規模ながら、2つの中島を設けた池跡を中央に配しており、小さい方の中島には、当時のものと見られる景石が残っています。



- 3
庭園の中島と景石



- 3区画の庭園遺構

《コラム》長法寺跡の石造文化財

長法寺跡では、本堂跡周辺を中心として花崗岩を用いた石塔や石仏などの石造物が多く残されています。確認された石塔は、大半が基礎部分のみであり、塔身以上の部材は、ほとんど認められないことから、後世に持ち去られたものと考えられます。

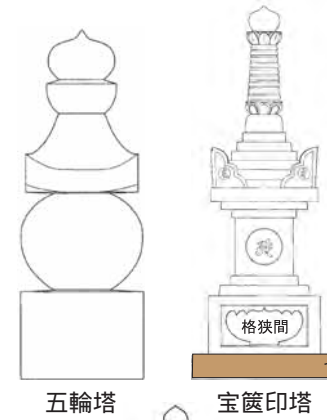
本堂背後の基壇上に置かれた方形の部材（a）は、宝塔や五輪塔などの基礎とみられます。建てられた位置からみて、開山の供養塔など重要な意味をもつ石塔であったと考えられます。また、本堂跡西側にある部材（b）は二区画の格狭間をもつ石塔の基壇です。現状で裏返しになっており、上面中央に円坑が彫られています。



本堂跡正面の切り石を使った石段
(右下図のd)



基壇をもつ石塔の基礎 (右図のa)

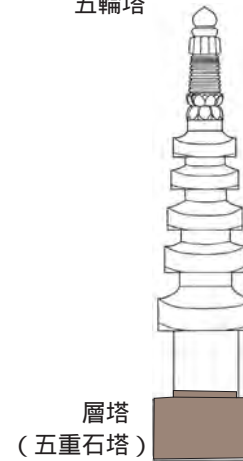


五輪塔

宝篋印塔



格狭間をもつ石塔の基壇 (左下図のb)



層塔
(五重石塔)



層塔の基礎と見られる部材 (左下図のc)



長法寺跡周辺の阿弥陀石仏

7) 坊跡の遺構

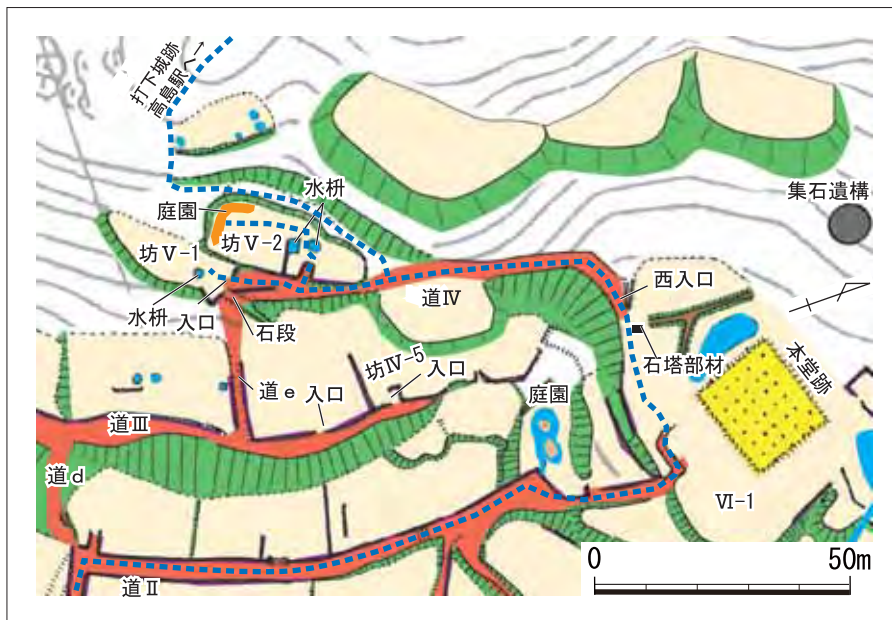
本堂跡の平坦地（ - 1 ）の南端を通って西へ進みましょう。格狭間の彫刻をもつ鎌倉～室町時代の石塔の部材があります。その先で平坦地の西側の入口を通り、道 に出ます。この道を南に進むと、残りのよい坊跡の区画（坊 - 1・2）をみることができます。

西尾根地区の多くの坊跡は、道に面して入口をもち、その両側に石垣や石塁が築かれています。入口にある門跡を通り、坊跡に入ると、仏堂や庫裏などとみられる礎石建物跡や、池の周りに石を配した庭園跡、生活用水を溜めておいた水枡、供養のための石塔や石仏などがみられるものもあります。

道 に面する坊 - 1・坊 - 2では、入口の石段や門の礎石、石を配した庭園跡、水枡などをみるすることができます。

道eを下ると道 に沿った坊群 があります。ただ、道 は倒木や崩落により通れない部分がありますので、見学の際は充分注意してください。

また、坊 - 2の西側の道を上ると高圧電線の鉄塔があります。そこから道標に従ってハイキング道を上ると、下の鼻打と呼ばれる峠を経て、打下城跡へ行くことができます。



坊 - 1正面

石塁に沿って伸びる道e(石段)を上りきると、坊の入口(人が立っている所)に至ります。石塁に開く入口には門が設けられていました。

- 1の入口
石塁の横に門跡の礎石があります。



坊 - 2の水枡

坊 - 2の入口を 入って右手(南側)には、1辺3mほどの石組みをもつ水枡が設けられています。

6. 長法寺跡周辺のみどころ

打下城跡

標高約 320 m に位置し、大溝古城とも呼ばれます。佐々木越中氏の清水山城の出城と伝えられるほか、琵琶湖の制海権を握っていた林員清の城とも伝えられます。城の要所に石積が見られます。



大溝城跡

近江を平定した織田信長の命によって築かれ、天正6年(1578)、甥の織田信澄が城主になりました。



琵琶湖や内湖(洞海)に面した水城で、現在、本丸の天守台跡の石垣を見ることができます。

圓光禅寺

分部家の菩提寺で、初代の^{おおみぞはんしゅ}大溝藩主となる^{みつのが にゆうふ}分部光信の入封にあたり、伊勢上野(現在の三重県津市)から当地に移されました。



大溝藩主分部家の歴代藩主の御霊が祀られています。「大溝藩分部家墓所」は滋賀県指定史跡となっています。



鵜川四十八躰仏

天文22年(1553)に近江の守護で観音寺城主であった佐々木六角義賢が亡き母(呉服御前)の菩提を弔うために弥陀の四十八願にちなんで建立したと伝えられています。ここには33体が現存しており、滋賀県指定史跡となっています。

白鬚神社

『近江水の宝』である白鬚神社は、猿田彦命を祭神とし、謡曲「白鬚」で知られ、長寿・航行安全の神として、信仰を集めています。

本殿は豊臣秀頼によって慶長8年(1603)に再建され、重要文化財に指定されています。

